

『魔王のいいなずけ』

著:水島 忍

ill:明神 翼

「私は魔王アリスティア。そして……おまえは私のいいなずけだ」

「いい……なずけ？」

芳人はしばらくアリスティアの自信満々な顔を見つめていた。いいなずけとは、もちろん婚約者のことだ。どうして自分がこの男の婚約者なのだろうか。誰かと間違っているのかもしれないが、そもそも性別が違う。それに、魔王だと名乗る変な男の婚約者にはされたくない。

「あんたと婚約した覚えなんかない。人違いに決まってる。オレの名前は有馬芳人だ！」

「有馬芳人か。まあ、別に名前なんかどうでもいい。おまえが私のいいなずけなのは間違いないからな」

名前も知らなかったくせに、どうしていいなずけだと言い張れるのか、さっぱり判らない。

「だいたい、オレは男だ！」

「男なのは見れば判る。私はそんな些(さ)細(さい)なことにはこだわらない」

「些細じゃないだろ！ 大きな間違いだ！」

アリスティアはふふんと鼻で笑った。

「照れているのか。可愛い奴」

芳人は口を開いたが、言葉が出てこなかった。こんな変な男に振り回されているのが、とても馬鹿馬鹿しく思えてきたからだ。

「と……とにかくっ、どうしてオレがあんたのいいなずけなんだ？」

「おまえの両親と契約したからだ。おまえが成長して二十歳になったら、迎えにくると。その代わりに、私はおまえの両親の願いをかなえてやった」

つまり、両親が悪魔と契約したということなのか。そんなことは、とても信じられない。芳人の両親はごく普通の夫婦だった。悪魔と契約するような人間ではなかった。まして、魔王に自分の息子を捧げようなんて、考えるはずもない。

「嘘だ！」

「私は嘘などつかない」

「じゃあ、やっぱり人間違いしてるんだ！」

アリスティアの目がきらりと光った。

「まさか。私に間違いなどない。おまえの身体のどこかに、ちゃんと私の印が入っているのが判る」

「……印？」

芳人には思い当たるふしがあった。悪魔につけられたような赤い痣(あざ)が、あまり人の目には触れない場所についている。

「薔(ば)薇(ら)とドラゴンの紋章だ。どうやら心当たりがあるようだな」

「し……知らないっ」

「無駄だ。あれは私のものだという印だ。あれがある限り、私から逃れられない」

子供の頃から、あの痣は変だと思っていたのだ。どう見ても、ごく自然の痣ではなく、誰かが描いたかのような痣だったからだ。とはいえ、薔薇とドラゴンかどうかまでははっきりしない。あれが魔王のいいなずけであるという証拠なのだろうか。

芳人は誰もが知らないような秘密を暴(あば)かれ、彼はやはり人間ではないのかもしれないと思い始めていた。だが、それを認めたとしても、自分が魔王のいいなずけだということには抵抗したい。そんなことは、とても受け入れられないからだ。

「それにしても、おまえはよく事故に遭(あ)うようだな」

突然、アリスティアにそんなことを言われて、芳人は驚いた。ここしばらく、芳人は何度も事故に遭っていた。が、奇跡的にいつも助かっていたのだ。

「どうして、それを……？ オレをつけてたのか？」

「成長したおまえを知らなかったから……まあ、品定めというやつだ。だが、何度も事故に遭うから、その度に私が助けてやった。おまえは私に感謝しなくてはな」

「助けた……？ あんたが？ どうやって？」

目を丸くすると、アリスティアはにやりと笑う。

「私にはいろんなことができる。姿を消すことも、肉体を使わずに物を動かすことも、おまえを危機から救うことなど造(ぞう)作(さ)もない。そろそろ私の存在を知らせてやってもいい頃だと思ったから、今日は直(じき)々(じき)に私が救ってやった。……どうだ？ 感謝したくなっただろう？」

そんなふうに言われて感謝したくなる人間がいるだろうか。とはいえ、今日、彼に助けられなかったら、あの特急電車で轢(ひ)かれていたのは間違いない。数々の事故についても、奇跡的に助かったことを思えば、やはり彼の助けによるものかもしれない。

「感謝はするけど……。いいなずけだというのは、オレは信じられない。うちの親は悪魔と契約なんかしない」

「ただの悪魔じゃない。私は魔王だ。悪魔の王だ」

改めて芳人は目の前の男に漂う威圧的な雰囲気を感じ取った。彼はごく普通の人間と同じような服装をしているが、前時代的な王族のきらびやかな服装やマントを身につけていてもおかしくはなかった。自分で言うように王の風格があると言ってもいい。

特に彼の凍(い)てつくような眼差しで見つめられていると、足に震えがくる。身体の芯(しん)まで凍りついてしまいそうだった。

だが、ここで怖(おじ)気(け)づいてはいけない。なんとか自分を取り戻そうと、拳(こぶし)を握り込んだ。

「その魔王が……どうしてオレなんかをいいなずけにしてるんだ？ オレと結婚するつもり？」

声が震えないようにするだけでやっとだった。魔王と結婚なんて想像もできないが、彼が自分をどうするつもりでいるのかは知っておく必要があった。

アリスティアは口元に冷やかな笑みを浮かべた。

「契約したときには結婚までは考えていなかったな。それに、悪魔は結婚という概念には縛(しば)られない。パートナーはその時々で自由に選ぶ。ただ、人間を相手にするときは、結婚という契約をすることもある」

「悪魔の世界では、それはどんな契約なんだ？」

「生涯を共にすることを誓う。もっとも、悪魔と違って、人間は寿命が短いからな。これは人間を手元に置きたいときの契約だ」

つまり、人間だけが悪魔に従わされる契約が結婚ということなのだ。彼らにとっては、一時の遊びのようなものだ。そんなことに付き合わされるなんて、たまったものじゃない。自分の一生がこの魔王に縛りつけられることを、芳人は想像もしたくなかった。「あんたが人間をどう思っているのか、よく判った。けど、オレは魔王なんかと一生一緒に過ごすなんて、真っ平だ！」

「魔王なんか、だと？」

アリスティアの瞳が危険な光を放った。つい口が滑ってしまったが、いくら本音でも本人の前で言ったのは失敗だった。いくら彼と結婚することが考えられないからといって、ここで殺されてしまっただけでは、元も子もない。

「あ……いや、それは言葉のあやで。その……要するに人間じゃない相手と結婚するのが嫌だってことだよ」

急に機嫌を取るような口調になってしまった自分が腹立たしい。けれども、怒った彼は怖かった。せっかく命を救ってもらったのに、みすみすここで死にたくはない。

「まあ、不安に思う気持ちは判らないでもない」

下手に出たのがよかったのか、アリスティアは理解を示してくれた。意外と物判りがいいようで、それなら結婚できないという言い分も理解してほしかった。

「そうそう。だから、オレとは結婚できない。諦(あきら)めて悪魔の世界に帰れよ」

アリスティアは腕組みをして、じっと芳人の目を見つめてきた。あまりにじっくり見つめられすぎて、芳人はよほど視線を逸(そ)らそうかと思った。だが、そのうち、彼は肩をすくめて笑みを浮かべた。

「キスはよかったですか？」

「……は？」

いきなり、そっちの方面の話に切り替わるとは思っていなかったから、芳人は戸(と)惑(まど)った。

「隠さなくてもいい。私には判る。キスをしたとき、私達には特別な繋(つな)がりがあると確信した」

「え、いや、そんなことはない……だろ」

キスされたとき、身体がカッと熱くなるのを感じた。あれが特別な繋がりというものなのだろうか。キスなんか今までしたことなかったし、相手が誰でもキスをすればああいう気分になるのかと思っていたが、そうではなかったのか。

いや、この男を信用するのはまだ早い。デタラメを言っているとも考えられる。

何しろ悪魔だ。本人がそう言っている。人間の心を弄(もてあそ)ぶのは簡単なはずだ。

「とにかく、繋がりがあるがなかりうが、オレはどうでもいいんだ。そもそもオレは両親があんたと何か取引したなんて、あり得ないと思っている」

「おまえの身体には紋章の痣があるのだろうか？」

ないとは言えなかったが、あるとも答えたくなかった。できる限り、芳人はこの男を遠ざけたかった。そのためには、どうすればいいだろう。

「オレは両親があんたと契約を交わしたという証拠がない限り、絶対に信じない。オレが信じない限り、この契約は無効だ！」

一方的な宣言だった。しかし、向こうも一方的に契約したと言い張っているのだ。これはお互い様だ。婚約しているという自分には、まったくそんな覚えがないからだ。アリスティアは驚いていたようだったが、やがて笑い出した。「それでこそ、私のいいなづけにふさわしい態度だ」

本文 p18～25 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>